

上の金谷・三壺渕・小垣外遺跡

飯田市北方土地区画整理事業に係る  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

# 北 方 遺 跡 群

1988. 3

飯田市北方土地区画整理組合  
飯 田 市 教 育 委 員 会

上の金谷・三壹測・小垣外遺跡

飯田市北方土地区画整理事業に係る  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

# 北 方 遺 跡 群

1988. 3

飯田市北方土地区画整理組合  
飯 田 市 教 育 委 員 会

## 序

中央自動車道西宮線の開通は飯田下伊那地区にめざましい変化をもたらしました。社会・経済活動をはじめ文化まで変えたこの高速道路のインターチェンジをもつ伊賀良地区においては、その表われは道路整備から始まり、インターから国道153号へつながるアクセス道路は4車線になりました。しかし、この国道も朝夕のラッシュ時には慢性的な渋滞を引き起こしています。そこで153号飯田バイパスの建設が進められ、昭和62年度にはその一部が共用開始されることになりました。

このバイパスの開通を契機に大型店舗進出・宅地造成などの開発が進むことが考えられ、このまま放置すれば当地区は雑然とした町並になる心配があります。そこで秩序ある都市計画を進めるために区画整理組合を組織し事業をはじめることになりました。

今回の調査は都市計画道路羽場大瀬木線の通過する部分の発掘調査を実施しました。その結果、いくつかの古代の人々の生活の跡を確認することができました。これらも伊賀良地区の歴史の一片となるわけです。

本報告書を刊行するにあたり、発掘調査等に対し、深いご理解と多大なご協力をいただいた区画整理組合のみなさんをはじめ、地元のみなさんに心より感謝申し上げます。

飯田市教育長

福 島 稔

## 例　　言

1. 本書は、飯田市北方地区における土地区画整理事業に伴なう埋蔵文化財包蔵地「上の金谷遺跡」・「三壺淵遺跡」・「小垣外遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市北方土地区画整理組合からの委託を受け飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、昭和61年度に「上の金谷遺跡」・「三壺淵遺跡」を昭和62年度に「小垣外遺跡」の発掘調査を行ない、昭和62年度に整理作業を行なった。
4. 本書は、調査員全体で検討の上、佐々木嘉和、吉川豊、小林正春が執筆し、佐々木が編集し、小林が総括した。
5. 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行なった。
6. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

## 目 次

序	1
例 言	1
I 調査の経過	1
1. 調査に至るまでの経過	2
2. 調査の経過	3
3. 調査組織	3
II 遺跡の環境	3
1. 自然環境	3
1) 上の金谷・三臺淵遺跡	6
2) 小垣外遺跡	11
2. 歴史環境	11
III 調査結果	11
1. 上の金谷遺跡	11
1) 工房址 1	11
2) その他	12
2. 小垣外遺跡	12
1) 溝 址	12
① 溝址 1	12
② 溝址 2	14
③ 溝址 3	15
2) 小竪穴	15
① 小竪穴 1	15
3) 土 坑	15
① 土坑 1	15
IV まとめ	18

## 挿 図 目 次

挿図 1. 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図 2. 調査位置及び周辺地図	5

挿図 3. 上の金谷遺跡、遺構・試掘坑位置図	8
挿図 4. 小垣外・三塗瀬遺跡、遺構・試掘坑位置図	9
挿図 5. 試掘坑土層柱状図	10
挿図 6. 上の金谷遺跡、工房址 1	11
挿図 7. 小垣外遺跡、溝址 1	13
挿図 8. 小垣外遺跡、小堅穴 1・溝址 2・3・土坑 1	14

## 表 目 次

第 1 表 上の金谷遺跡、遺構試掘坑出土遺物	16
第 2 表 上の金谷・三塗瀬遺跡、試掘坑出土遺物	17

## 図 版 目 次

第 1 図 上の金谷遺跡工房址 1・試掘坑出土遺物	19
第 2 図 上の金谷遺跡試掘坑・小垣外遺跡溝址 1 出土遺物	20
第 3 図 小垣外遺跡溝址 1 出土遺物	21
第 4 図 小垣外遺跡溝址 1 出土遺物	22

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	上の金谷遺跡工房址 1
図版 2	"
図版 3	小垣外遺跡溝址 1・土坑 1 など
図版 4	" "
図版 5-1	" " 2・3
図版 5-2	" 小堅穴 1
図版 6-1	" グリット 2
図版 6-2	" " 7
図版 6-3	" トレンチ 1
図版 7-1	上の金谷遺跡工房址 1 出土
図版 7-2	" " 試掘坑

図版 7-3 上の金谷遺跡工房址 1

図版 8 " " 試掘坑

図版 9 小垣外遺跡溝址 1

図版 10 " "

図版 11 発掘調査風景

## I 経 過

### 1. 調査に至るまでの経過

飯田市北方地区は、中央自動車道西宮線飯田インターチェンジに隣接する地区であり、近い将来無秩序な市街化の進行が懸念される状況であった。このため道路・公園などの公共施設はもちろん計画的な街路整備が急務となり、飯田市北方土地区画整理組合により、昭和60年から65年にかけて事業が推進されることとなった。

事業実施に先立ち、対象範囲に複数の埋蔵文化財包蔵地があり、その取り扱いについて飯田市建設部都市計画課・北方土地区画整理組合・飯田市教育委員会の関係者による協議を行ない、それに基づき飯田市教育委員会が発掘調査し、記録保存をはかることとなった。

対象範囲が広大で複数の遺跡が所在し、個々の具体的な状況が不明であり、当面都市計画道路羽場大瀬木線の路線内を試掘し、その状況により本格的な調査を行なうこととなった。

### 2. 調査の経過

#### (1) 昭和61年度の調査

関係者の諸協議に基づき、昭和61年9月24日上の金谷地区1435番地の普通畑とビニールハウス内の調査に入る。調査はまず2m四方の試掘坑を設定し、遺構・遺物の出土があった場合に、拡張して調査を行なうこととした。試掘坑を18箇所入れ、遺構を検出したG1・G11を拡張して調査した。遺物はほとんどどの試掘坑から出土したが、ローム層上に堆積した砂質土からである。水田の調査は収穫後に行なうことになる。

9月26日、三塙地区に試掘坑3箇所を入れた。南西側に小垣外地区のやや高い台地があり、その外側の湿地帯になるらしく、灰白色砂土が基盤で、その上に砂利混りの漆黒色土がのっており遺構の検出はなかった。遺物は上方の流れ込みと思われる少量が出土したのみであり、調査を終了した。

11月18日、上の金谷地区の水田の調査に入り、試掘坑13箇所、トレント1箇所を入れる。遺構の検出はなく、遺物の出土を少量みただけであり、調査を終了した。

11月24日、小垣外地区的台地上に試掘坑を4箇所入れる。ローム層まで40~30cmと浅く、遺構の検出はなかった。この地区にも作物があり、道路建設着工前に、再度調査を行なうこととする。

## (2) 昭和62年度の調査

11月16日、小垣外地区の調査に入る。作物のある場所・立木・電柱を除いて、重機で表土の排除を行ない調査を行なう。国道153号飯田バイパス建設に伴なう発掘調査で溝址が発見されており、その続きを調査した。調査予定地内に作物が栽培し続けられており、調査の進行上に支障があったが、11月20日写真撮影・測量調査を終了し、11月21日調査区の埋めもどし作業を重機で行なって、発掘調査を完了した。

## 3. 調査組織

### 1) 調査団

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和、佐合英治、吉川豊、馬場保之

作業員 高木義治、森 章、中平隆雄、窪田多久三、向田一雄、北村重実、福沢トシ子  
木下喜代恵、柳沢謙二、正木実重子、池田 幸子、唐沢古千代、川上みはる、  
木下 玲子、櫛原 勝子、小平不二子、武田 恵美、丹羽 由美、松本 恭子  
宮内真理子、吉川紀美子、吉川 悅子、吉沢佐紀子、大日向富士子、牧内八代

### 2) 事務局

飯田市教育委員会 社会教育課

塩沢 正司 (社会教育課長)

池田 明人 ( " 文化係長)

小林 正春 ( " 文化係)

吉川 豊 ( " )

馬場 保之 ( " )

土屋 敏美 (庶務課)

## II 遺 踪 の 環 境

### 1. 自然環境

#### (1) 上の金谷・三臺洞遺跡

飯田市伊賀良北方地区は、市街地の南西5~3kmに位置し、中央アルプス南端の山麓に発達した扇状地上にあり、南東に緩く傾斜している。広大な扇状地形の為微地形は複雑な変化を見せており、ほぼ小台地と低湿地の連続といえる。扇状地の特徴である水不足に対応する為上の金谷遺跡の東から南に飯田松川から揚水した大井川が走っている。調査地区的標高は530m前後であり南北方向がやや高くなっている。減反政策の為作物には大きな変化があり、低湿地にも果樹の植栽が見られる。

各試掘坑の土層は、挿図5の土層柱状図のとおりであるが、概観すると、基盤と思われる花崗岩の風化した灰白色砂土の上に、砂質土が堆積している。基盤を切る自然と思われた溝状の落ち込みや微地形の傾斜も試掘坑で確認した。堆積した土は砂質であり、南沢川の氾濫によって運ばれたものであろう。昭和36年の梅雨前線による集中豪雨でも被災している。

地形を概観したが、小台地が生活の場、低湿地が生産の場と推測したが、調査区内には生活の場は確認されず、やや山寄りに位置すると思われる。

（佐々木嘉和）

#### (2) 小垣外遺跡

伊賀良地区の平坦部のほとんど全部が、天竜川の支流が山地を削って運搬堆積した洪積期天竜層である。そしてその大部分は飯田松川が木曾山地から運んだものである。

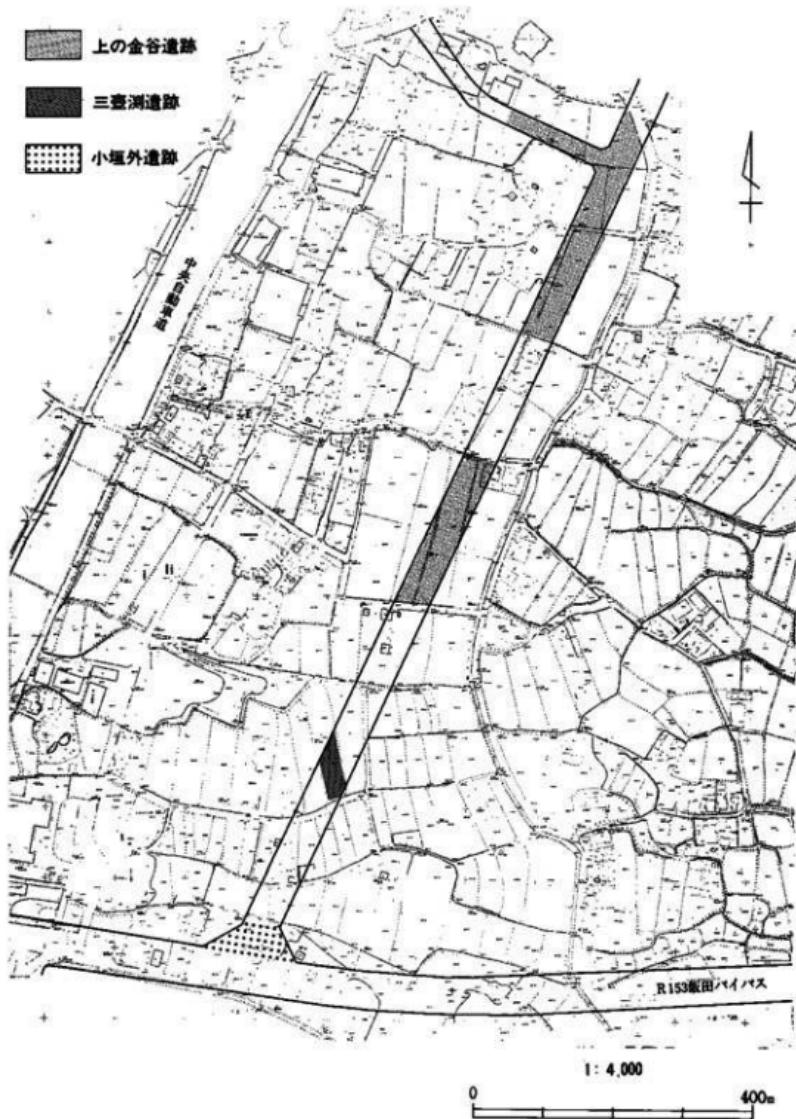
北方地籍は天竜川の支流で中央アルプスの前山である笠松山から流れだした南沢川によって形成された扇状地の扇端部に位置する。現在南沢川は人工の水路となり毛賀沢川へ流れ込んでいる。この毛賀沢川も以前はこの地区の雨水等を集めて台地を削り天竜川へ流れ込むだけの川であった。

扇状地であるため水の確保にはかなりの努力を要した。そのひとつが大井（川）であった。妙琴で飯田松川から水を取り入れ段丘上をかなり長い距離で引いている。その大井は北方においては扇状地の縁部をながし、南沢川が毛賀沢川と合流する地点で交差する。したがって、現在の水利を見ただけでは当時の（弥生から古墳時代にかけての）地形等は判断できなくなっている。

今回発掘した小垣外遺跡を大雑把ないかたで限定すれば、中央自動車道のインターから飯田よりに東側の側道を育良公会堂へ、そこから東に大井までと、飯田インターの前方を流れる南沢川とそれに交差する大井までに囲まれた部分である。



挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図



挿図2 調査位置及び周辺地図

地形は南端にあたるバイパス部分だけがやや高くなっているのみで、その他はほぼ平坦であり水田に利用されている。

(吉川 豊)

## 2. 歴史環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、山地を除いてほぼ全面的に包蔵地といって良く99遺跡を数える。調査がなされた遺跡は西の原遺跡（注1）・立野遺跡（注2）・よ志原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外（辻垣外）・三壺淵・上の金谷各遺跡（注3）・中島平（注4）・宮ノ先（注5）・酒屋前（注6）・鳥屋平（注7）・殿原（注8）・八幡面・小垣外（注9）・梅ヶ久保（注10）遺跡などである。

縄文時代から中世まで各期の好資料・遺構が発見され飯田下伊那地区を代表する埋蔵文化財包蔵地密集地区といえる。

特に立野遺跡は戦後間もなくから數度の調査がなされ、（注2）「立野式土器」の標式認定により、長野県を代表する縄文時代早期の遺跡である。しかし、遺跡は耕地整備・土取り工事等により消滅状態に近くなっている。

中央自動車道に伴なう各遺跡の調査では各期の住居址等が検出され扇状地中央の遺跡状態が明確にされた。

伊賀良地区内の古墳は52基（注11）を数える。残存するものは9基であるが、墳丘をわずかに残すものが大半である。古墳の分布は扇状地端部がほとんどである。

奈良時代に入って、古代東山道に「青良駅」の名がある。県内に入って「阿知駅」の次に位置する駅であるがその所在は確認されていない。伊賀良地区内のどこにあると思われ、その位置については諸説がある。諸説共に中央自動車道から南東側の扇状地端部にかけて設定されている（注13）。

中世に入ると伊賀良庄の記録（注13）がある。鎌倉時代初期伊那郡伊賀良庄の地頭が、北条時政で江馬氏が司り、北条氏滅亡後は小笠原氏の所領となり（注4）、小笠原氏繁栄の基盤のひとつとなった地区である。

この様に伊賀良地区を歴史的に概観すれば広大で肥沃な地であり、原始より古代・中世・近世・近代・現代と大いに栄えた地ということができる。

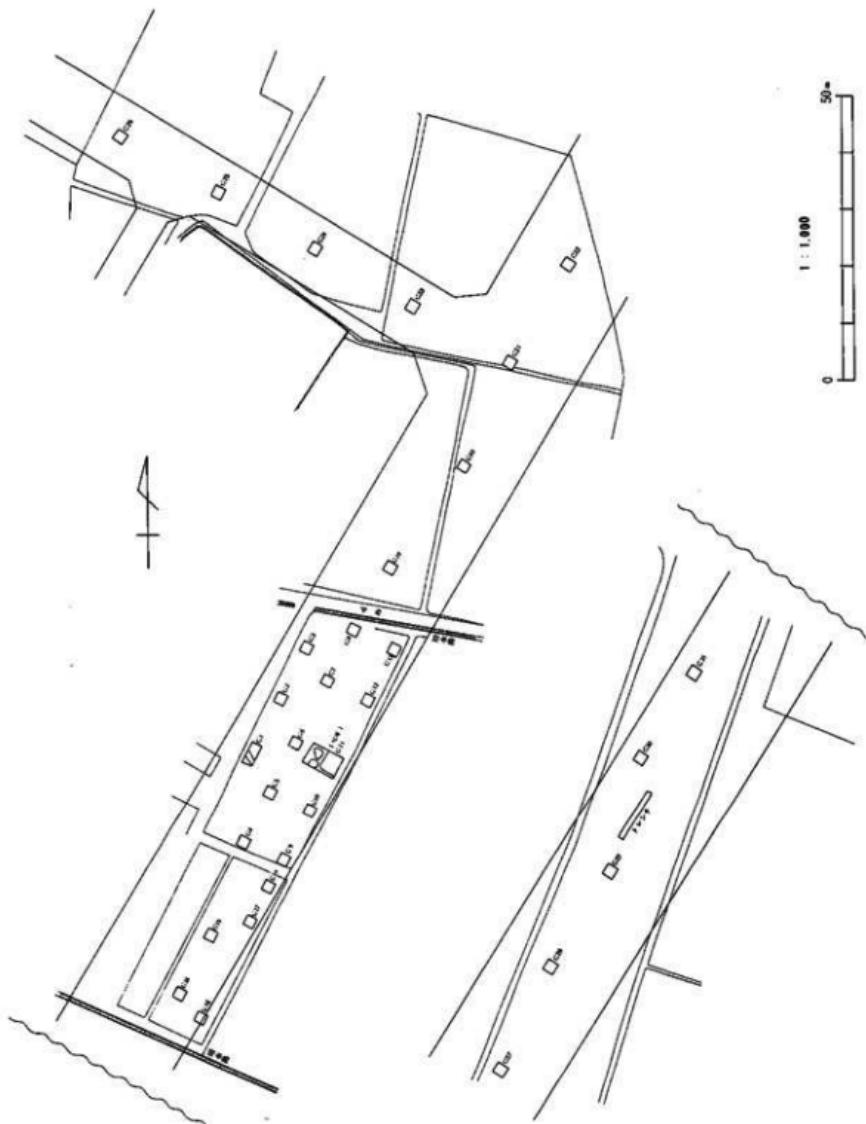
なお今回調査の上の金谷・三壺淵・小垣外遺跡について中央自動車道建設時に発掘調査されており、上の金谷遺跡では、弥生時代から中世までの住居址13軒と柱穴群・土坑などが台地上に密集して検出された。三壺淵遺跡では台地先端部に古墳時代住居址3軒を検出、「あり方から見て西方に広がる」とされている。小垣外遺跡では、一部辻垣外遺跡に入るが、縄文時代前期末から中世までの住居址22軒と柱穴群・土坑など検出され、「遺構は用地外西方に広がる」とされてい

る。又小垣外遺跡も国道153号飯田バイパス建設に先立ち、昭和60年度に調査（注9）されている。

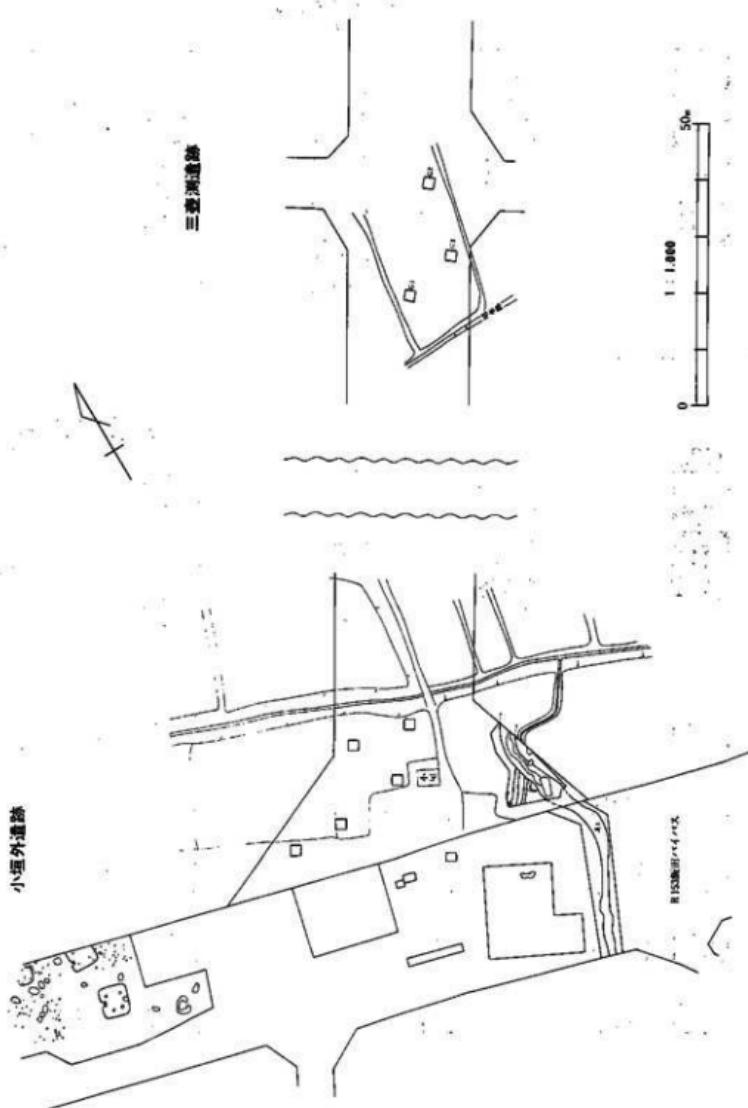
これらの調査結果を踏まえて発掘調査を行なったわけである。

#### 注

1. 伴信夫・宮沢恒之 1967 「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡調査報告」『信濃』19巻12号
2. 神村透 1968・69 「立野式土器の編年的位置について(1)～(7)」『信濃』20巻10号～21巻7号  
1982 「立野式土器の編年的位置について(完)」『信濃』34巻2号
3. 岡田正彦ほか 1972 「中央道調査報告——飯田市内その2——」長野県教育委員会
4. 佐藤魁信 1977 「伊賀良中島平」飯田市教育委員会
5. 佐藤魁信 1978 「伊賀良宮ノ先」飯田市教育委員会
6. 佐藤魁信 1983 「酒屋前遺跡」飯田市教育委員会
7. 佐藤魁信 1983 「鳥屋平」飯田市教育委員会
8. 佐藤魁信 1987 「殿原遺跡」飯田市教育委員会
9. 佐藤魁信 1987年度 報告書刊行予定 飯田市教育委員会
10. 小林正春 1987 「梅ヶ久保遺跡他」飯田市教育委員会
11. 長野県史刊行会 1981 「考古資料編—遺跡地名表」
12. 市村成人 1955 「下伊那史」第2巻下伊那誌編纂会
13. 市村成人 1961 「下伊那史」第4巻下伊那誌編纂会
14. 宮下操 1967 「下伊那史」第5巻下伊那誌編纂会

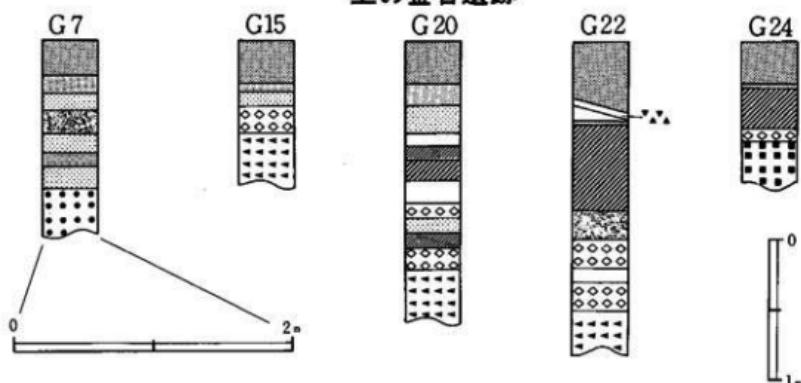


拠図3 上の金谷遺跡 造構・試掘坑位置図

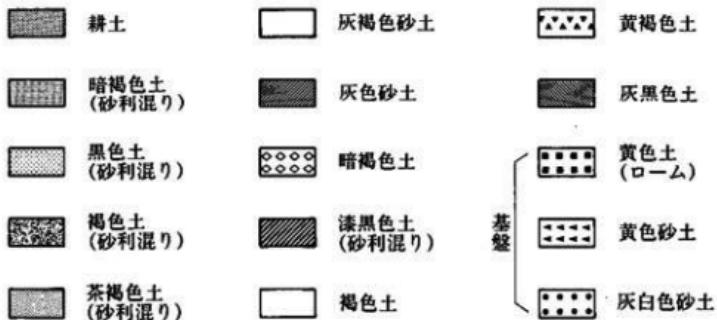
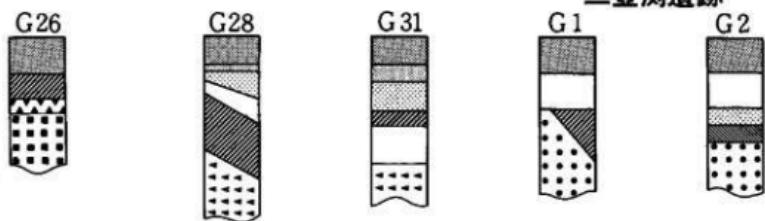


插図4 小堰外・三臺測遺跡 遺構・試掘坑位置図

### 上の金谷遺跡



### 三臺測遺跡



挿図5 試掘坑・土層柱状図

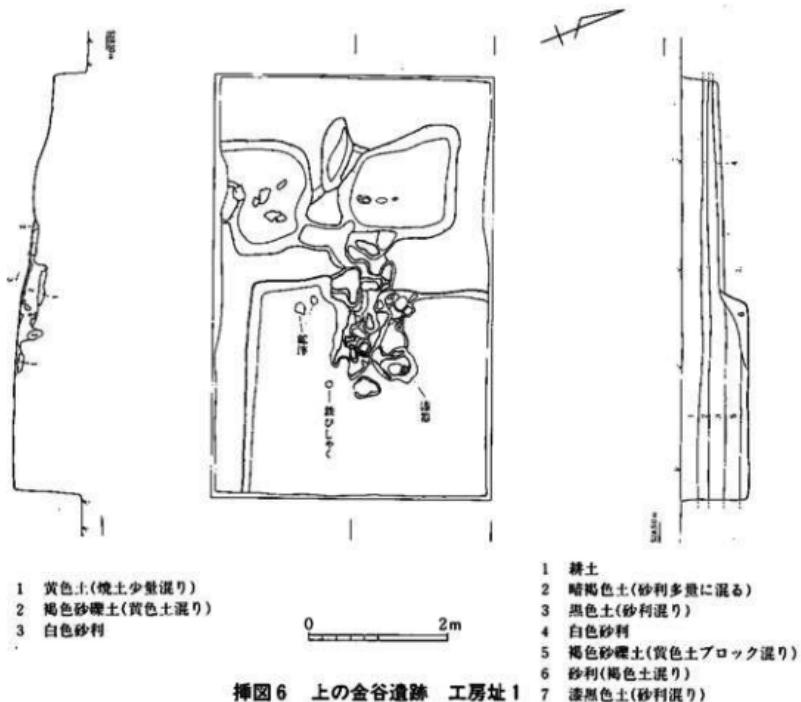
## III 調査結果

### 1. 上の金谷遺跡

#### (1) 工房址 1 (挿図 6・第1図)

調査区の中央やや北東より、G11に検出し、拡張して調査した。拡張した範囲は  $6 \times 4\text{ m}$  であり、工房址 1 とした竪穴状遺構と、それに伴なうと思われる土坑状落ち込みを調査した。竪穴の規模は 3.5 m 前後の方形と思われ、北西壁を奥壁として主軸は N62°W を測る。

覆土は褐色砂礫土が上層に、黒色土が下層に堆積していた。壁高は 30cm 前後を測るが、土質の



為緩やかな傾斜であった。床面は比較的堅く締っており、柱穴は検出に務めたが確認できなかった。北西壁は中央に鍛冶工房址とした根拠の焼土・黄色粘土・鉱滓があった。中央部分の断面図でもわかるが、覆土中に焼けた黄色粘土が混在した状態であった。黄色粘土で築いた何らかの施設が、崩壊したものであろう。粘土の周囲に鉱滓（粘土壁が非常な高温にあり表面が陶化したものであろう）片が散布していた。豊穴の北西壁上に検出した土坑状の落ち込みもこの工房址に伴なう施設と思われ、右側の底部には黄色粘土が出土した。検出面からの深さは20cm強であり底部はほぼ平らであった。左側の穴は不整脩円形で底部は緩く凹み、検出面から60cm余の深さがある。覆土中から割れた縁6個黄瀬戸皿片が出土してこの縁も工房址に関連するものと思われる。

遺物は鉱滓（4）の他に、鉄製のひしゃくないし皿（1）、図化はできないが漆器の漆のみが出土している。平らにつぶれており径20cmの箱形と思われた。漆には布痕が残っている。他に小さな鉄製品（8～14）があり、8は刀子の茎、9は釘であろう。砥石は3個出ており、7は砂岩の自然縫を利用している。他の2個は泥岩製の緻密なものである。工房址からではないが、左側の穴底部から黄瀬戸の皿 $\frac{1}{5}$ が出土している（2）。出土位置は不明であるが、黒褐色砂土中から織部の型押しの変形向付片（3）がある。

時期の決め手になるものは、工房址に伴なうと思われる穴から出土した、黄瀬戸片1点のみであり、確定はできないが中世ないし近世にかかる鍛冶工房址と思われる。

#### (2) その他 (挿図3)

G1に検出した溝状構造は、自然の溝と推測され、調査は試掘坑2個にとどめた。

各試掘坑の土層は様々であるが、G20（挿図5）が今回調査区の主たる土層と言ってよく、低地に土砂が堆積あるいは造成された台地端とほぼ同じ高さになったと思われる。G23は台地端に近いと思われ水田面から90cmでローム面が出ている。

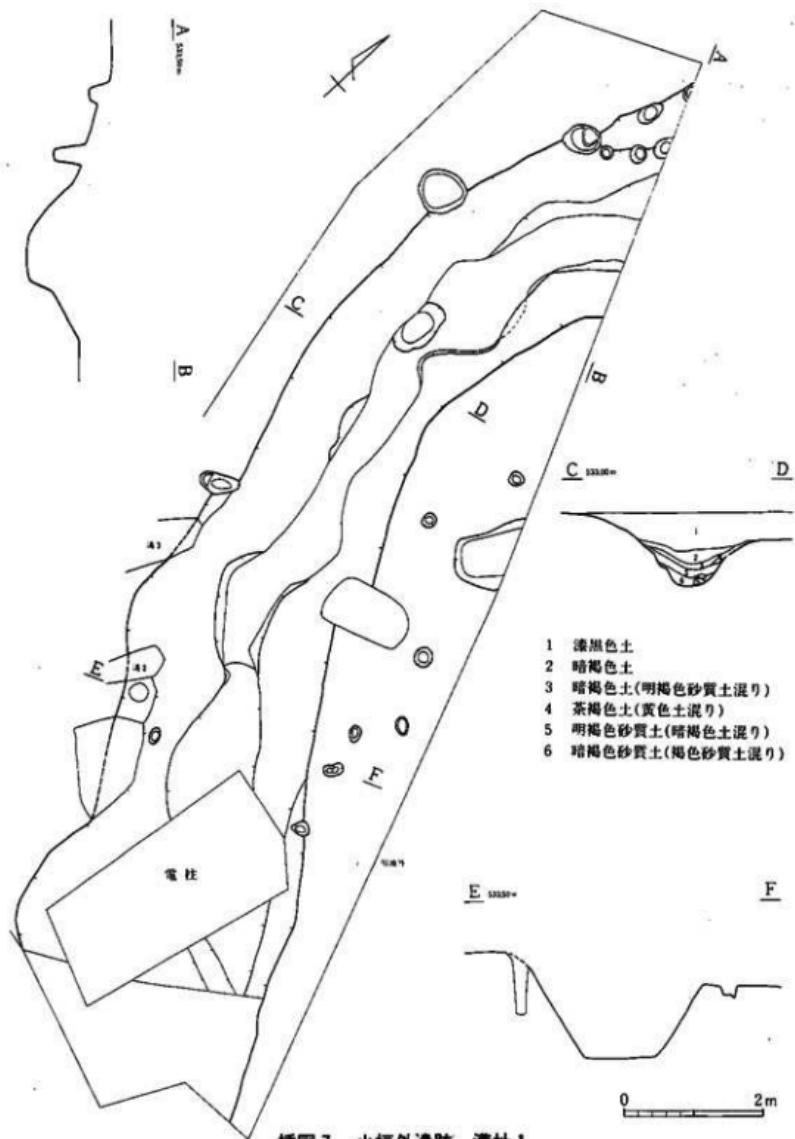
遺物は表（第1・2表）を見て頂くが、出土量は少ない。概観すると鉄・鉱滓の出土割合が高く、この遺跡の特徴と思われる。図化可能な遺物はごくわずかで、図番号を備考に記した。

## 2. 小垣外遺跡

### (1) 溝 址

#### ① 溝址1 (挿図7)

国道153号飯田バイパス建設に伴なう調査（注9）で確認されていた溝址1の続きである。道路用地東南境ぎわに、長さ16mを調査した。溝址2・3、小豊穴1に切られる。電柱が溝址の中央に立っており、そこは調査できなかった。上部はローム層を掘っており、底部はローム層下の砂礫層を20～10cm掘っていた。砂礫層に鉄分の沈殿層が、縞状に入りており、覆土と推測し、掘り過ぎた部分もある。幅は約3～2mで断面形は逆台形をなしており、台地端の斜面中段に掘られている。覆土は上部約50cmに漆黒色土が堆積しているが、溝址に直接入った土ではなく、台地



挿図7 小塙外遺跡 溝址1

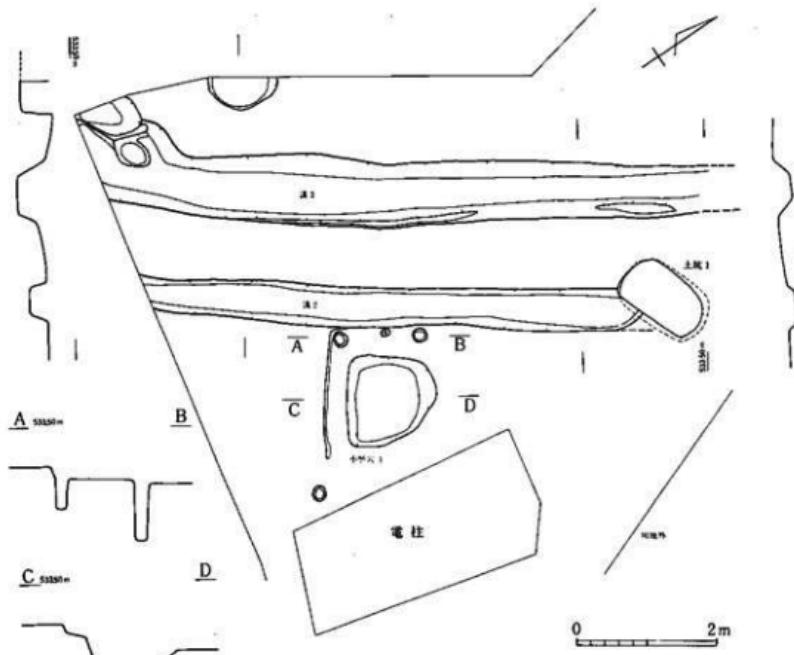
斜面の下部の低地へ堆積した土である。古墳時代遺物のはほとんどはこの漆黒色土層下部から出土し、堆積は古墳時代から以後であろう。中層には暗褐色土を基本とした土が30~10cmが入り、下層には褐色土を基本に隙、砂利が混入した土が入っていた。中層下部から下層で弥生時代の土器片が出土した。側壁は比較的急傾斜である。水の流れた痕跡は、底部にわずか認められたが、用水路とは確認できず集落の周囲を区切る環濠の性格が強いと思われる。遺物は上部の漆黒色土層から、古墳時代の土師器（第2図8~10、第3図、第4図）が多量に出土し、須恵器も一片あった。

時期は、遺物出土層などから、弥生時代後期に開削され、ほぼ埋設したのが古墳時代後期前半であり、漆黒土が堆積したものであろう。

## ② 溝址2（挿図8）

調査区の南側、全体からいえばほぼ中央部よりに溝址3と平行して検出。溝1の西壁を切り、土坑1と切り合い消滅する。土坑との新旧関係は不明である。

幅60~40cmで、長さは7mを確認した。底部の高低差は地形に添って南西~北東に傾斜し70cm



挿図8 小塙外遺跡 小豈穴1・溝址2・溝址3・土坑1

を測る。底部は平坦で壁は比較的急角度にたちあがり断面は逆台形になるが、溝址1の上では壁はほとんどその高さをもたない。

漆黒色土の覆土から遺物の出土はなく時期は不明である。

雨水などの自然水が流れたものと考えられ、水流の方向は南西～北東方向と考える。

(吉川 豊)

### ③ 溝址3 (挿図8)

調査区の南側、全体でいえばほぼ中央よりに溝址2と平行して検出。調査地区境で穴によって切られ、溝址1の西壁を切り覆土中で消滅する。

幅100～70cmで、長さは8.6m確認した。底部の高低差は地形に添って南西～北東に傾斜し80cmを測る。底部は平坦で、壁は比較的急角度でたちあがり断面は逆台形を呈するが溝址1の覆土中ではその高さをほとんどもたない。また、確認部分のはば中央の東壁には段を持つところがある。

漆黒色土の覆土からは遺物の出土はなく時期は不明である。

雨水などの自然水が流れたものと考えられ、水流の方向は南西～北東方向と考える。

(吉川 豊)

## (2) 小堅穴

### ① 小堅穴1 (挿図8)

溝址2が溝址1と交差する近くに検出した。溝址1の西壁を切っている。

堅穴は $1.2 \times 1.0$ mの隅丸方形で深さは約45cmを測る。壁はほぼ垂直にたちあがるが、地形が傾斜しているため壁高は西で約45cm東で約20cmを測る。底部は平坦で、標高はほぼ同じレベルである。

堅穴の外側で、壁から30～20cmほど離れ南東を除く各コーナーには径20cmほどの小穴がある。また西側には10cmほど掘り込まれた段が溝2の東壁から約1.8m確認された。

漆黒色土の覆土からは遺物の出土はなく時期は不明であるが、形態から見て柱を立てた小屋と考える。

## (3) 土坑

### ① 土坑1 (挿図8)

溝址1の東岸を切り、溝址2と切り合って検出したが新旧関係は不明。 $1.2 \times 0.7$ mの楕円形で深さ40cmを測る。底部は平坦で、壁はそれぞれにえぐり込んで、断面は台形を呈する。

漆黒色土の覆土から土師器が出土したが、これらは溝址1の搬入物と考えられる。その他には遺物の出土を見ないため、時期は不明である。

遺跡	試掘坑	土器・石器	陶磁器	鉄製品 鉄鉱など	点数	出土層位	備考
上 の 金 谷	G 1	弥生甕	鐵輪皿 黄瀬戸皿 鐵軸碗		1 1 1 1	暗褐色土砂利混 “ “ 耕 土	
	G 2	打製石斧			2	暗褐色土砂利混	実測第2図5
	G 4	有肩屈形状	灰軸碗 鐵軸摺鉢	鉛 淚	1 1 1 5	暗褐色土砂利混 “ “ 黑褐色土	実測第2図1
	G 5		内耳土鍋 青磁碗 平鉢 磁器碗	鉛 淚 鋳型?	1 1 1 1 3 1	暗褐色土砂利混 耕 土 “ “ 黑褐色土 “	中世 近世
	G 6	弥生臺 砥 石			1 1	黑色砂利 “	
	G 7	砥 石		鉄 鉤	1 1	黑色砂利 黑色土	実測第2図6 実測第1図15
	G 8	内耳土鍋			1	黑色土	
	G 9		黃瀬戸平鉢 摺 鉢 山茶碗	羽 口 鉛 淚 鉄製品	1 1 1 1 1 小破片 多い	暗褐色土砂利混 “ “ “	
	G 10	砥 石	甕 黄瀬戸鉢 臺 摺 鉢	鉛 淚	1 1 1 1 1 1	暗褐色土砂利混 耕 土 暗褐色土砂利混	中世 富田窯、近世 中世
	G 11 工房址 1	砥 石 弥生甕	内耳土鍋 黄瀬戸皿 “ 段皿 “ 碗 天目茶碗 鐵軸碗 “ 盆 變型鉢	鋳型?	1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 11 1 多 数 1	暗褐色土 黑色土 暗褐色土砂利混 黑色砂利 暗褐色土砂利混 暗褐色土砂利混 暗褐色土砂利混 “ “ “ 鉛 淚 鉄 盆 鉄 製品 漆 器	常滑窯 実測第1図5・6・7 実測第1図2 織部 実測第1図3 実測第1図4 実測第1図1 “ “ 8~14

第1表 上の金谷遺跡、造構・試掘坑出土遺物一覧

遺跡	試掘坑	土器・石器	陶磁器	鉄製品 鉄滓など	点数	出土層位	備考
上の金谷	G13	深鉢		鉛滓 銅	1 2 小片あり	耕土 "	縄文
	G15		碗	鉛滓 鉄製品片	1 7 2	耕土	近世
	G16	砥石		鉛滓	1 4	暗褐色土	
	G17	砥石	黄瀬戸皿 " 瓢	鉛滓 鉄滓	1 1 1 5 小片多い	耕土 " 黑色土 "	実測第2図7
	G18		山茶碗 黄瀬戸皿	鉛滓	2	耕土 黑色砂利	実測第2図2 実測第2図4
	G19		碗	鉛滓	1 1		近世
	G21		茶碗		1		近世
	G24		黄瀬戸皿		1	漆黒色土	
	G25		鉄釉茶碗		1		
	G27		茶碗		1		近世よろい茶碗
三塗淵	G28		摺鉢		1	耕土	
	G29		鉄釉皿		1	"	
	G30		鉄釉茶碗		1	"	
	G31		天目茶碗 志野繪皿 坏		1 1 1	" "	実測第2図3 近世
	G2	石器	須恵壇		1 1		小破片

第2表 上の金谷・三塗淵遺跡試掘坑出土遺物一覧

## IV まとめ

飯田市北方地区の埋蔵文化財調査は、昭和46年度に中央自動車道西の宮線建設に先立つもの、昭和58～60年度に行なわれた、R153バイパス建設に先立つものなどである。

また、地形的には中央アルプス笠松山麓から発達する扇状地上に立地し、古くから肥沃な土地として開けた地区である。

今回の調査結果は、本書に示したとおりであるが、当初予想した広範囲にわたる縄文時代から平安時代にかけての集落址等の存在はなく、居住域としては空白地であるとの事実が示され、扇状地上の土地利用の姿が浮かび上がったといえる。

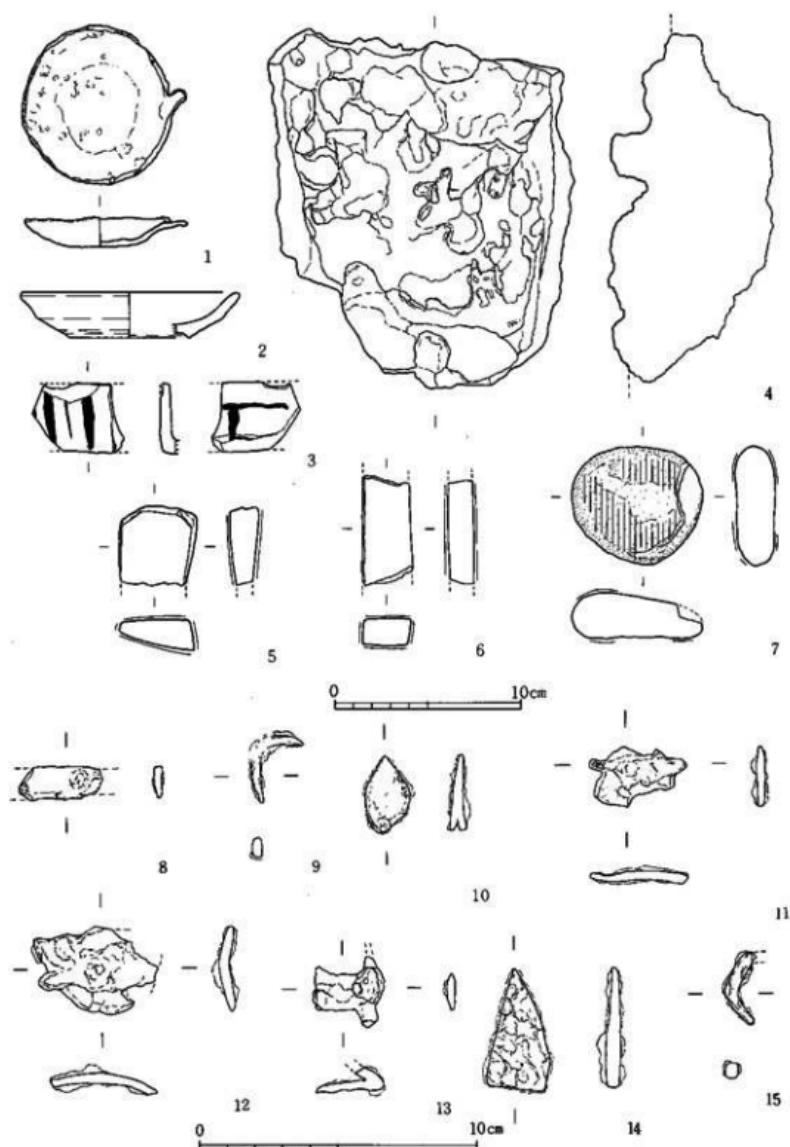
調査結果による土層の堆積状態を見ると、調査地南端の国道飯田バイパス寄りに微高地がありそこに限定してローム層の堆積が認められた。それ以外の今次事業対象範囲はほぼ全域は砂礫の厚い堆積があり、現地形の形成されたのは中世から近世にかけてであり、縄文時代から平安時代にかけては大きな凹地状の微地形が捉えられ、本地域の周辺部に各時代の集落が発達したものと判断される。

具体的には、南側の国道153号飯田バイパスに沿って小垣外・八幡面・殿原の各遺跡が北側の凹地（今回事業範囲）を見おろすような状況であり、縄文時代前期・中期、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の各集落が立地する。西方は、中央自動車道建設時の調査で示されたように、上の金谷・三瀬淵・小垣外遺跡があり、その以西に縄文時代中期・弥生時代後期・古墳時代・平安時代の集落の発達した状況が捉えられる。また北側は、南側の小垣外遺跡後の立地する微高地と対峙するように西の原の尾根が、鼎一色地区まで延びており、具体的な状況は不明な点が多いが縄文時代早期から後期、弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代の集落の存在が予測される。

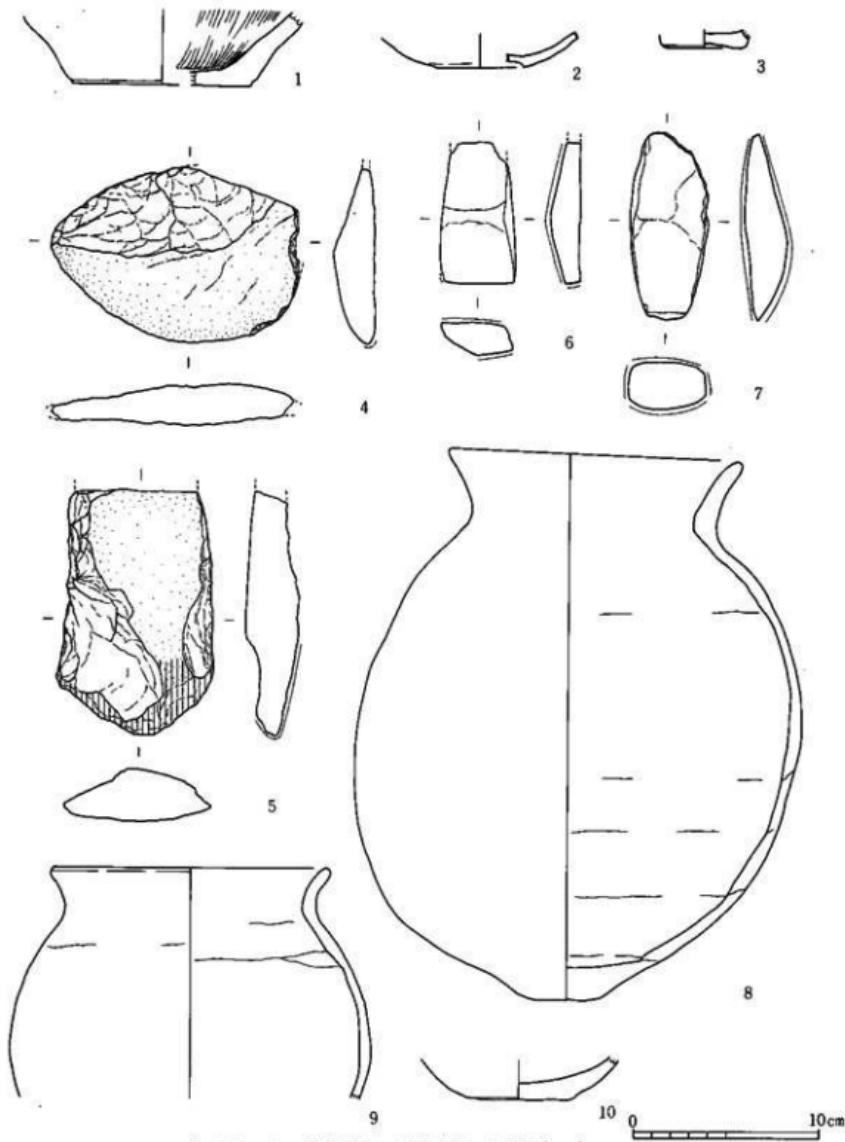
以上、今次調査による土層堆積状況で示された事実と周囲の遺跡立地状況など合わせ考えると今回の区画整理実施範囲の大半が縄文時代以降の各時代においては、居住域としては空白部にあたるといえ、特に弥生時代以降の農耕地として利用された姿が示されるといえる。それにより、今後の周辺部開発にあたってより慎重な対応が埋蔵文化財の保護・保存に大きな意味を持つものといえる。

（小林正春）

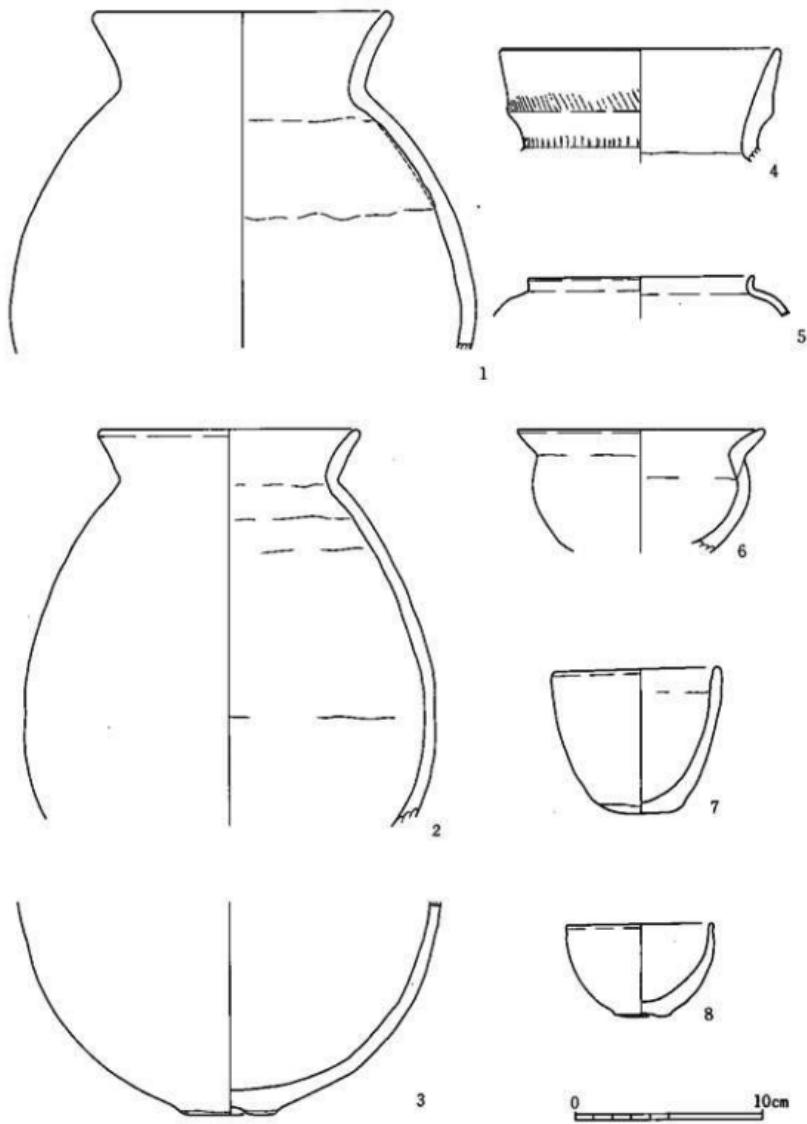
# 図 版



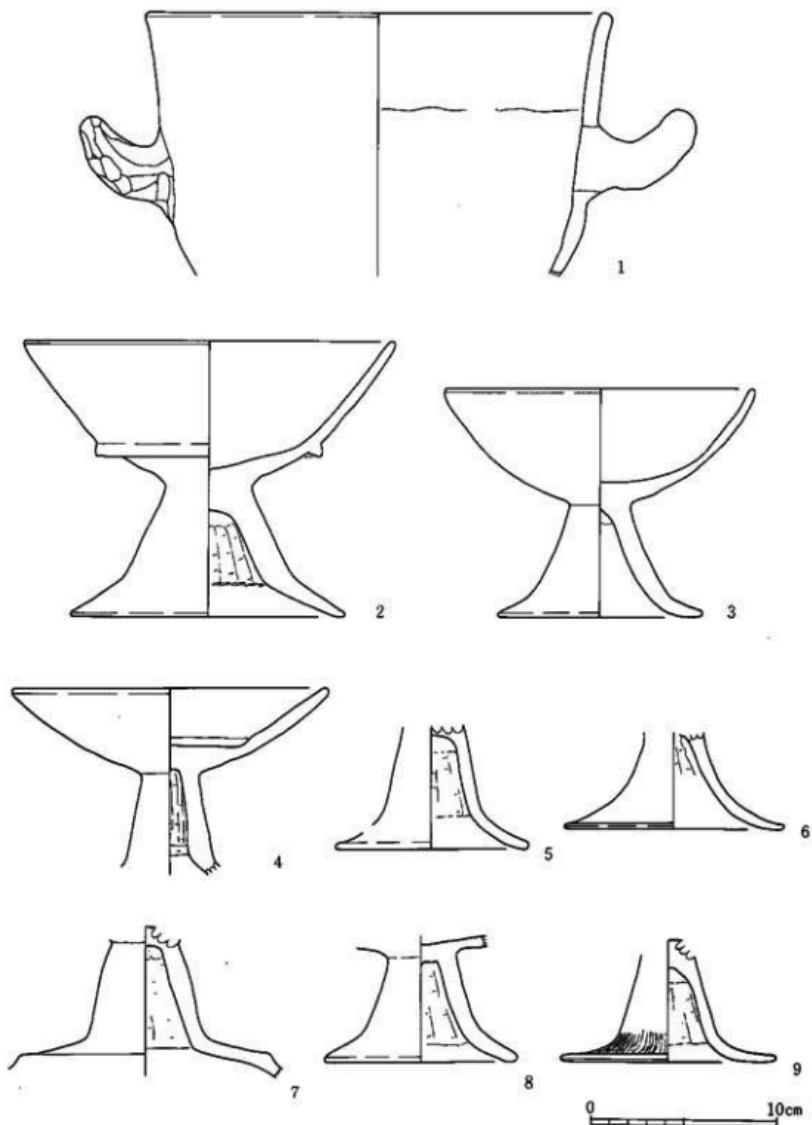
第1図 上の金谷遺跡 工房址1出土遺物(1・2・4-14) 試掘坑出土遺物(3・15)



第2図 上の金谷遺跡 試掘坑出土遺物(1~7)  
小垣外遺跡 溝址1出土遺物(8~10)



第3図 小垣外遺跡 溝址1出土遺物



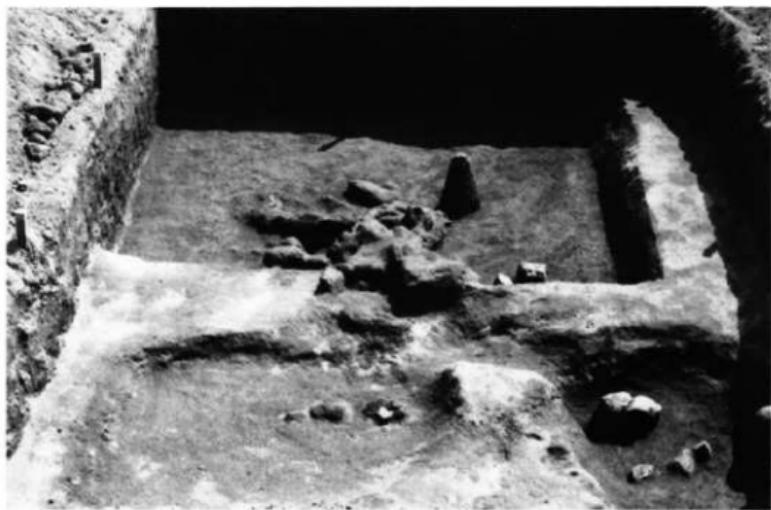
第4図 小堰外遺跡 溝址1出土遺物

# 写 真 図 版

図版 1



上の金谷遺跡工房址 1 南西から



工房址 1 北西から

図版 2



工房址 1 遺物・粘土出土状態

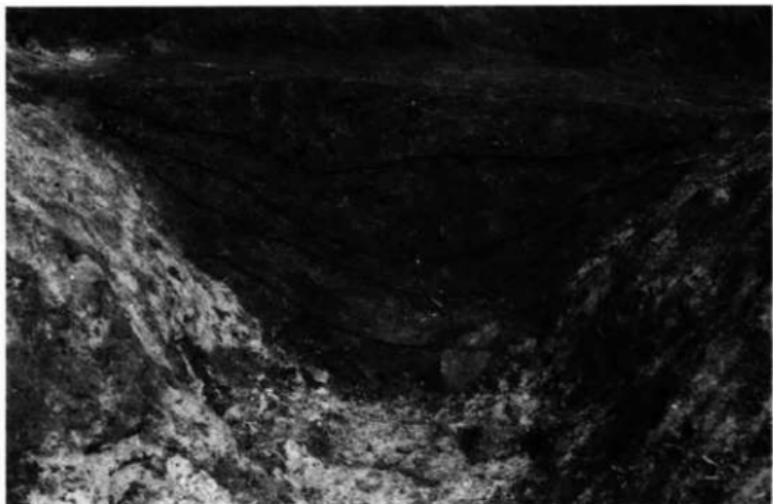


工房址 1 粘土断面

図版 3



小塙外遺跡 溝址 1・土坑 1など



溝址 1 土層断面



溝址 1 遺物出土状態



溝址 1 遺物出土状態



圖版 5



小垣外遺跡 小竪穴 1

図版 6



グリット2 土層断面

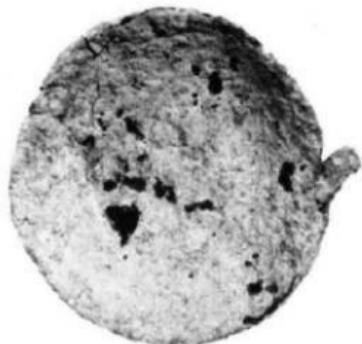


グリット7 土層断面

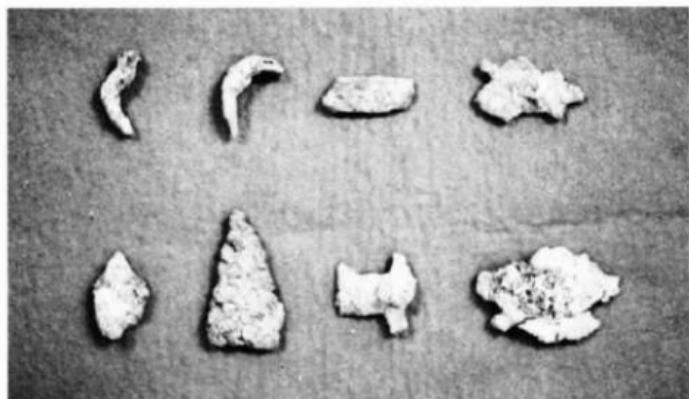


トレンチー

図版 7



上の金谷遺跡工房址 1 出土鉄ひしゃく



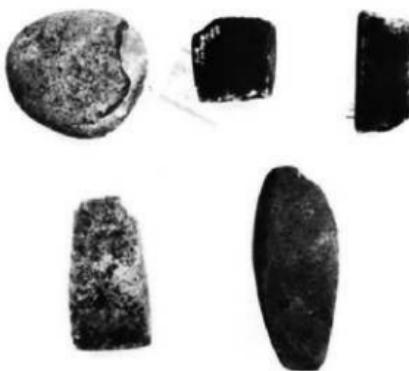
工房址 1 試掘坑出土鉄製品



工房址 1 出土鉄滓



上の金谷遺跡 工房址1・試掘坑出土陶器

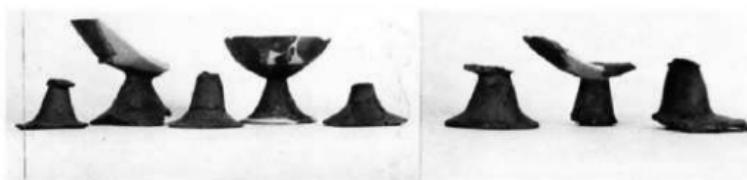


上の金谷遺跡 工房址1・試掘坑出土磁石

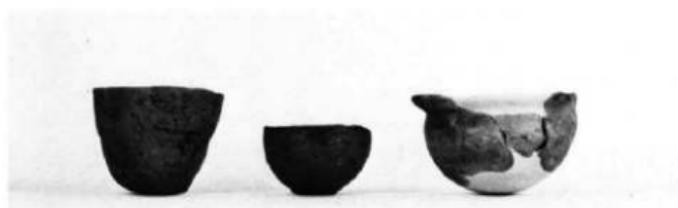
图版 9



小垣外遺跡 溝址 1 出土遺物



高 坯

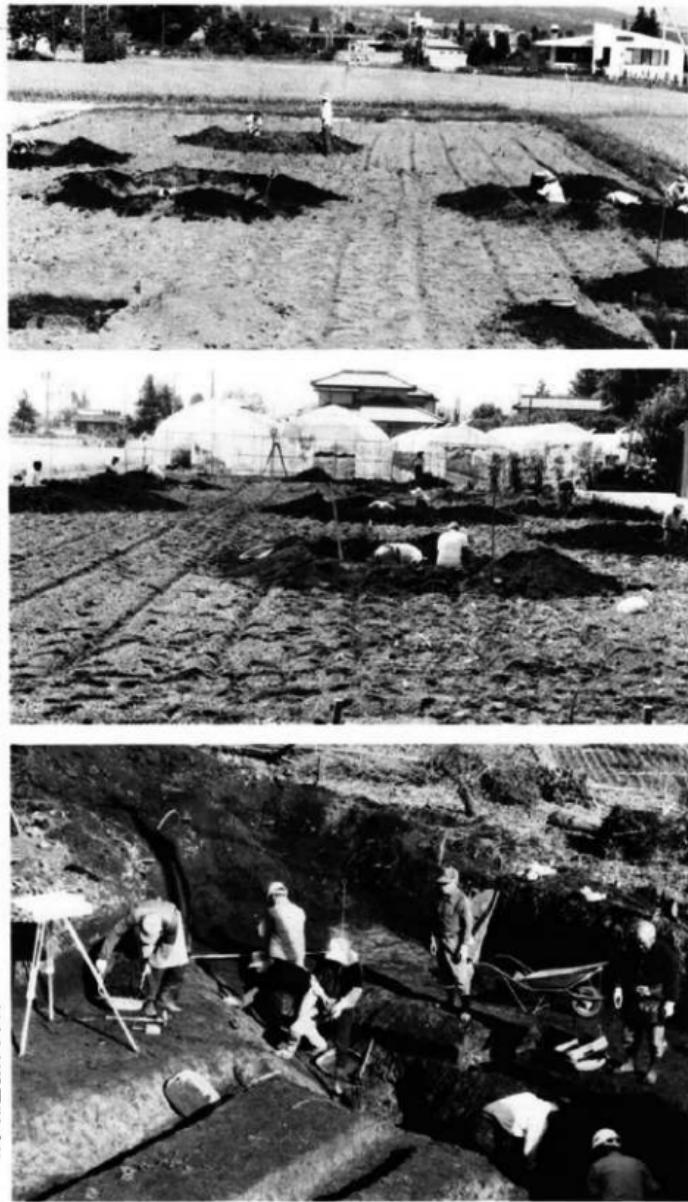


坯



小垣外遺跡 溝址 1 出土遺物

図版11



---

---

飯田市北方土地区画整理事業に係る  
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

北 方 遺 跡 群

昭和63年3月25日 印刷  
昭和63年3月31日 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地  
飯田市教育委員会

印 刷 御 飯 田 プ リ ン ト

---

